

- 宮古島市は、平成19年にゴーヤーの拠点産地に認定され、生産者・作付面積が増えてきたが、**単収の地域間・農家間の格差が大きく、単収の高位平準化や新規生産者への支援が課題。**
- このため農業改良普及課では、**産地の現状・課題を整理し、実証ほの設置や技術支援を強化**するとともに、**新規就農者の育成支援**に取り組んだ。
- その結果、**単収1.5倍、出荷量2.3倍**に増加するとともに、**品質の向上、産地力の強化、新規就農者の育成**につながった。

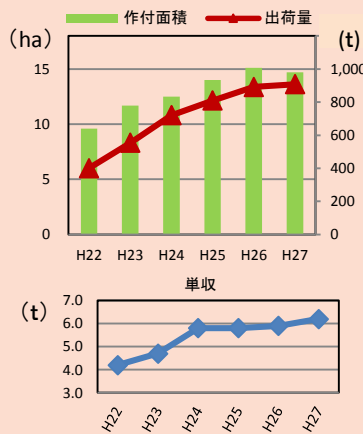
具体的な成果

普及指導員の活動

1 ゴーヤー出荷量等の増加

■栽培技術が向上し、単収・出荷量等が増加傾向であり、農家の収益が向上
(H22→H27)

- ① **作付面積**
10ha → 15ha
- ② **出荷量**
401t → 908t
- ③ **単収(10aあたり)**
4.2t → 6.2t



平成22～28年度

- 県関係機関・JAとの連携により、**栽培講習会・現地検討会の内容を充実。**
- **土壌分析結果に基づく細かな施肥指導の実施。**

平成23～24年

- 調査研究により、**高単収農家の栽培管理や産地の実態調査を実施し、現状及び課題を整理。**

平成22～28年度

- 病害虫の予防対策や低温期における保温対策、有望品種の栽培等の実証ほを設置し、**栽培技術の向上及び長期収穫を目指して指導。**

平成26～28年

- **新規就農サポート講座**に加え、就農5年以内の生産農家を対象とした**就農ステップアップ講座(講習会、現地検討会)**を開催し、就農定着に向けて支援。

普及指導員だからできたこと

・ 専門技術を持ち、研究機関やJA等との橋渡しができる普及指導員だからこそ、**地域としての課題を整理し、方向性を一つにして連携した栽培技術指導により単収向上を図ることができた。**

・ 日頃から連携している指導農業士等、JA、研究機関等の**関係者を結びつけ、新規就農者を育成するための支援体制を構築することができた。**

2 品質及び産地力の向上

■ 県内の品評会で品質の高さや産地活動が評価

- ① **野菜品評会**
金賞5人
うち、農林水産大臣賞2人
- ② **野菜産地活動表彰**
3回(H23・26・27)
- ③ **優良農家表彰**
農林漁業賞3人



3 新規就農者の育成支援

■ 栽培講習会や各種講座、農家での長期研修による実践的な栽培技術の向上
■ 関係機関と連携した就農相談から就農定着までの支援体制の確立
(H22→H27)

- ① **ゴーヤー栽培農家数(JA専門部会)**
82人 → 134人

宮古島市におけるゴーヤー産地の育成・強化

活動期間：平成22年度～（継続中）

1. 取組の背景

宮古島市は、平成19年にゴーヤーの拠点産地に認定され、生産者・作付面積が増えてきたが、単収の地域間・生産者間の格差が大きく、単収の高位平準化や新規生産者への支援が求められていた。平成22年の宮古地区平均単収は4.2t/10aだが、地域間では2.98t/10aから7.06t/10aと地域差があり、優良農家では長期収穫により12t/10aであった。

2. 活動内容（詳細）

農業改良普及課では、関係機関と連携して産地の現状・課題を整理し、実証ほの設置や技術支援を強化するとともに、新規就農者の育成支援に取り組んだ。

（平成22～28年度）

県関係機関（農業研究センター、病害虫防除技術センター）やJAとの連携により、栽培講習会・現地検討会の内容を充実させるとともに、土壌分析結果に基づいた土づくりや基肥の施用等細かな指導を実施した。

（平成23～24年度）

調査研究により、高単収農家の栽培管理実態調査を行うとともに、宮古島市やJAと連携して産地の課題を抽出するためのアンケート調査を実施した。その結果、栽培管理面では太陽熱土壌消毒による連作障害対策、深耕、灌水、着果量、病害虫防除について改善の余地があること、新規農家の栽培面積は比較的小さく規模拡大を希望している等がわかってきた。

（平成22～28年度）

硫黄粉剤の定期散布による病害虫防除を目的に実証ほを設置した結果、従来ゴーヤーの長期栽培において問題になっていたうどんこ病やチャノホコリダニ等病害虫の予防対策ができた。その他にも、農業研究センターで育種したゴーヤーの新品種の栽培実証ほ及びハウス内張ビニルや保温マルチの利用による低温期の開花・開葯の安定を目的とした実証ほを設置し、地域の栽培技術の向上および長期収穫を目指して指導をおこなった。

（平成26～28年度）

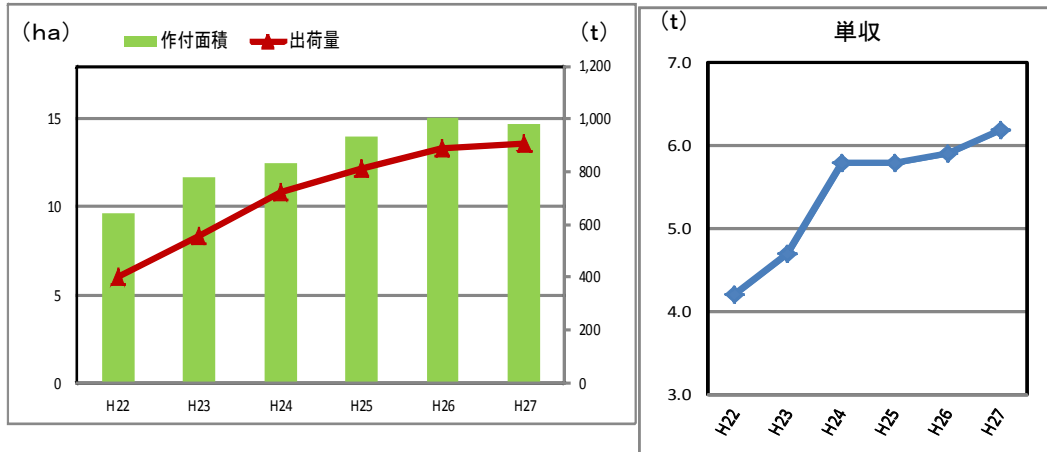
宮古地区農でグジョブ推進会議及び農業改良普及課が主催する就農希望者や就農3年以内の新期就農者を対象とした新規就農サポート講座や、就農5年以内の新期就農者を対象とした就農ステップアップ講座（講習会、現地検討会）を積極的に開催し、栽培技術及び経営管理の向上に向けた支援の充実を図った。特に、就農ステップアップ講座については、指導農業士等の協力を受け、現地指導の強化に取り組んだ。

3. 具体的な成果（詳細）

1 ゴーヤー出荷量等の増加

栽培技術の向上及び長期収穫により、単収・出荷量等は増加傾向であり、農家の収益向上につながった。

作付面積は、平成 22 年度の 10ha から平成 27 年度には 15ha、出荷量（JA ゴーヤー専門部会）は平成 22 年度の 401 t から平成 27 年度には 908 t、単収は 4.2 t/10a から平成 27 年度には 6.2 t/10a と大幅に伸びた。



2 品質及び産地力の向上

毎年 2 月に開催される「おきなわ花と食のフェスティバル」において、これまで多くの賞を受賞している。

特に、野菜品評会においては、色のりや形状、ボリューム、揃い等の品質の高さが評価され、平成 23 年度から平成 28 年度まで継続して金賞（6 人）・銀賞（7 人）・銅賞（8 人）を受賞しており、その中でも平成 23、27 年度には農林水産大臣賞を受賞した。また、平成 23、26、27 年度には野菜産地活動表彰を受けたほか、3 人が優良農家として農林漁業賞を受賞した。



3 新規就農者の育成支援

栽培講習会や各種講座、指導農業士の元での長期研修により実践的な栽培技術の定着につながった。また、就農計画の作成、農地の確保、施設や機械の整備等では、市町村等関係機関との新規就農支援のための連携を強化することで、就農相談から就農定着までの支援体制の確立することができた。

これにより栽培農家数（JA ゴーヤー専門部会）は、平成 22 年度の 82 人から平成 27 年度には 134 人に増加した。

このような取組みの結果、単収 1.5 倍、出荷量 2.3 倍に増加するとともに、品質の向上、産地力の強化、新規就農者の育成につながった。

4. 農家等からの評価・コメント

(JA ゴーヤー専門部会A氏)

硫黄粉剤の利用により病害虫に対する農薬散布回数や防除にかかる時間が大幅に短縮され、本技術の実証ほ設置をきっかけにして、講習会や現地検討会、農家同士の交流を通して地域内に広まった。

宮古地域では関係機関と農家の連携がうまく取れているので、今後もその連携を活かして新規就農者支援、農家への技術支援を行ってほしい。

(指導農業士B氏)

宮古島市は、農家、行政、普及機関、研究機関、JA、農業委員会等の連携が取れている方だと思う。新期就農者への技術指導やアドバイス等についても、可能なことは協力していきたい。今後も、ゴーヤーの生産振興に努めて、産地全体としてレベルアップしていきたい。

5. 普及指導員のコメント

(農業改良普及課・農業技術班長)

専門技術を持ち、農業研究センターや病害虫防除技術センター、JA、資材メーカー等との橋渡しができる普及指導員だからこそ、地域としての課題を整理し、方向性を一つにして関係機関が連携した栽培技術指導により単収向上を図ることができた。

(農業改良普及課・普及企画班長)

日頃から連携している農業士、市町村、JA、研究機関等の関係者と新期就農者を結びつけ、新規就農に関する支援体制を構築することができた。

特に、就農希望者の希望品目としてゴーヤーが多いことから、栽培技術及び経営管理能力の向上を図るため、栽培講習会、農業経営講座、現地検討会を重点的に実施するとともに、JA ゴーヤー専門部会の講習会等にも積極的に参加を促したことが成果につながった。

6. 現状・今後の展開等

今後も引き続き、関係機関との連携を強化して、技術力向上と経営安定を図り、ゴーヤー産地の育成・強化に努める。

また、新規就農者については、指導農業士等の協力を得ながら、就農定着に向けて支援を継続する。